

## 人の役に立つ

皆さんは、2017年に105歳でお亡くなりになった医師の日野原重明さんを知っているでしょうか。

日野原さんは1911年に生まれ、京都帝国大学医学部から臨床医の道に進み、戦後、日本の医療改革に奔走されます。日本初の人間ドックの開設に尽力したり、当時、「成人病」と言われた病気の予防に取り組み、「生活習慣病」という言葉を定着させました。日野原さんは生涯、現役の医師として、一〇五歳で亡くなる直前まで患者を診続け、穏やかに生きるための助言をしておられました。そんな日野原さんの言葉を二つ紹介します。

「才能は誰の中にも無限に眠っていて、花開く瞬間を待っている。」

日野原さんは、60代半ばの知人が癌の再発に怯え、仕事への情熱や人生への気力を失いかけていたとき、何か新しいことを始めるよう勧めました。「絵でも描いてみたら？」と助言したところ、「絵なんてとんでもない。」と答えたそうです。ところが10年後、その方は絵画で賞を取り、銀座で個展を開くまでになり、80歳を過ぎて、仕事にも絵画にも情熱を持って取り組むようになったそうです。

「才能は誰の中にも無限に眠っている」という言葉を日野原さんは、年齢に怖じ気づいて引き下がる生き方をしない、という文脈で使われましたが、私は、若い皆さんに対して、未来への励ましの言葉として贈りたいと思います。年を重ねてからでも新たな才能は開花します。ましてや、皆さんは18歳、まだ、試されていない分野はたくさんあります。まだ見つかっていない才能の発掘を信じて、様々なことに関心を持ち、本を読み、人と話をし、チャレンジを続けてください。

二つ目は、次の言葉です。

「失うことを恐れるより、与えることで喜びは生まれる。」

日野原さんは、社会に貢献することの喜びを感じて、105歳の人生の最後まで、現役の医師として活躍する道を貫かれました。

動物と違い、人間は他人のために行動することができます。それは「人の役に立ちたい」という、人間ならではの気持ちに由来するものだと思います。その行動は、自分に恵みを与えてくれた家族、周囲の方々、地域、社会への貢献であろうと思います。貢献へのやりがいは又、自分自身をさらに成長させる糧になります。自分が受けた恵みに感謝し、自分が人のために何ができるか考え、行動できる人になってほしいと願います。

人の持つ内なる力を信じ、人の役に立ちたいという日野原さんの信念は、生き方の道筋を示唆してくれるように思います。皆さんには、「自分が何で社会の役に立てるか」を考えながら、自分の持つ可能性を探る日々を重ねてほしいと思います。

(令和2年3月 卒業式の式辞から)